



# 古道が紡ぐ物語



## 壬申の乱の足跡を訪ねて③大倭戦線

～大伴吹負、飛鳥京を制圧し、近江朝廷軍と交戦～

天智天皇の弟・大海人皇子と、天智天皇の子・大友皇子とが皇位継承をかけて争った「壬申の乱」。今回は、大海人皇子に味方した豪族の一人、大伴吹負の飛鳥京制圧と、飛鳥京奪還のため差し向けられた近江朝廷軍との激突を描きます。

### 大伴吹負、近江朝廷軍と大倭で交戦する

#### ■動揺する近江朝廷

大海人皇子が桑名郡家に到着した672年6月26日、近江朝廷に「大海人皇子、東国に入る」の一報がもたらされた。『日本書紀』は「群臣悉く愕き京内震動し、或る者は逃げて東国に入ろうとし、また或る者は山や沢に隠れようとした」とその衝撃を物語る。西に逃れるのではなく、東国に入ると記しているのは、近江朝廷を見限って大海人皇子につくことを意味しているのだろうか。

混乱の中、大友皇子は東国に急使を派遣したが、大海人皇子軍が前日25日の時点で不破の道（岐阜県関ヶ原町）を塞いでおり、使者は捕縛され目的を果たせなかったことは前話で述べた通りである。また西国の豪族に、討伐のための兵の動員を要請したが、これも満足に進まなかった。

かねてから大海人皇子一派と見られていた吉備国守・当摩広嶋、筑紫大宰・栗隈王は出兵を拒否。広嶋は派兵を要請した使者によって暗殺され、栗隈王は佩刀した二人の子どもたちに守られ暗殺を免れた。また後の記事は、河内国守・米目塩籠が大海人皇子軍に帰順すべく準備していたところ、謀が漏れて自害したことを記す。

大友皇子の父・天智天皇の近江遷都に代表される急進的な改革は、豪族たちの不信感を強める一方、大海人皇子はそうした不満を巧みに利用し彼らの信任を集めていたと考えられる。

#### ■大伴吹負、挙兵し飛鳥京の兵庫を制圧

大伴馬来田・吹負兄弟もまた、近江朝廷に不

満をもち大海人皇子に味方した豪族の一氏であった。病と称して近江朝廷を退出し、自邸に引きこもっていた2人は、6月24日、先に兄の馬来田が菟田の吾城で大海人皇子一行に合流。6月26日には、弟の吹負が三輪氏や鴨氏等地元の名族らと挙兵の準備を整えていたと『書紀』は記す。

大海人皇子が無事に不破に入って2日後の6月29日、大伴吹負はついに行動を起こした。高市皇子（大海人皇子の子）の軍勢を名乗って、突如飛鳥京内の近江朝廷軍営になだれ込んだのである。

小墾田の兵庫（武器庫）を抑え、飛鳥京を制圧した吹負は、功績を大海人皇子に認められ將軍を拜命する。翌7月1日、吹負軍は近江に向け北進を開始し、稗田（大和郡山市稗田町）に至った。

中世の環濠集落（灌漑・防御施設として水堀を巡らせた集落）の特徴をよく残す地として有名な稗田は、稗田阿礼の出身地でもある。彼はのちに天武天皇（大海人皇子）に仕えて才覚を見出され、『帝紀』『旧辞』を暗唱した。『古事記』は彼の記憶等をもとに太安万侶が編纂したものである。



稗田の環濠。右側は稗田阿礼を祀る賣太神社

### ■三方面作戦の展開

ここで、稗田に着いた吹負軍に急報が入る。飛鳥京奪還のため、近江朝廷が河内から大軍を派遣してきたという。そこで吹負は少ない手勢を分けて別働隊を組織し、竜田・大坂・石手道の防備を命じた。各方面に分かれた部隊は、やがて数に勝る近江朝廷軍に押され、総退却を余儀なくされている。

しかし、そもそも西への備えなく近江朝廷を目指せば、飛鳥京の奪還を許すことは明白である。これは憶測だが、本来西への備えを担うはずだった河内国司・来目塩籠が、事前に叛乱計画が洩れ自害したため、吹負は急遽兵を分け対処せざるを得なかったのではないだろうか。

7月3日、乃楽山に駐屯していた吹負は、部下から本拠防衛の重要性を説かれ、ただでさえ少ない手勢を割いて飛鳥京に遣わした。飛鳥京防衛部隊は、京中の橋板を壊し、街角に立てて楯としたが、これが思わぬ形で功を奏することとなる。

### ■吹負、敗走から一転攻勢へ

7月4日、吹負軍は大野果安率いる近江朝廷軍と激突。しかし圧倒的な戦力差の前に吹負軍は持ちこたえられず、潰走を始める。

果安は吹負軍を追撃しながら中ツ道を南進し、いよいよ飛鳥京に迫った。陥落も時間の問題と思われたその瞬間、果安は突如転進し撤退を開始する。果安は、飛鳥京の街角に立てられた楯を見て伏兵の存在を疑い、交戦することなく引き揚げたのである。こうして飛鳥京は辛くも陥落を免れた。

その頃、果安に敗れた吹負は、身一つで伊賀方面へと遁走していた。しかし墨坂に至った時、不破から急派された大倭救援軍に遭遇。命拾いした吹負はすぐにとって返し、金綱井（橿原市今井町）で四散した兵を再度組織した。

この時、『書紀』は興味深いエピソードを2点伝えている。この地の豪族、高市許梅は突然失語し、3日の後に「吾は高市社（河俣神社、橿原市雲梯町）の事代主神。また身狭社（牟佐坐神社、橿原市見瀬町）の生霊神なり。大海人皇子の前

後に立ち不破までお送りし、官軍を守護す。西の道より軍勢来る。用心せよ」と言って醒めた。また、村屋の神も神官に憑依し「今わが社（村屋坐弥富都比売神社、田原本町蔵堂）のある中ツ道より軍勢来る。社の道を防げ」との託宣を下した。これらの予言通りにそれぞれの方角から敵が来襲したため、人々は驚いたというものである。

近江朝廷軍がそれぞれの方角から襲来するのは、飛鳥京の奪取を目指す以上、当然ではある。しかし、それぞれの地の土着豪族が、大海人皇子に味方した事績を自らの奉ずる神の託宣に仮託して記録したものと考えれば、また違った意味を持つ。

7月7日、吹負は當麻衢（大坂道と石手道との分岐点）に兵を集結させ、葦池のほとりで近江朝廷軍の河内方面部隊を撃破。翌8日には同じく大倭方面部隊を箸陵（箸墓）で破った。以降、大倭において近江朝廷軍の活動は『書紀』には記されず、大海人皇子は完全に大倭を回復したのである。（次号に続く）（太田宜志）

### 壬申の乱 関係年表（大伴吹負らの動き）

とき	主な出来事
672年 6月24日以前	大伴馬来田・吹負兄弟、病と称して近江朝廷を退出
6月29日	吹負、飛鳥京の制圧に成功、将軍を拝命
7月1日	吹負、飛鳥から北へ出発。稗田で別働隊を組織
7月2日	別働隊、近江朝廷軍に敗れ退却
7月3日	吹負、兵を割いて飛鳥防衛に充てる
7月4日	吹負、近江朝廷軍と激突するも大敗。逃走中に大倭救援軍と遭遇、反転攻勢へ
7月7日	吹負、當麻衢の戦いで近江朝廷軍を破る
7月8日	吹負、箸墓の戦いで近江朝廷軍を破り、大倭を回復

